

T A G E N

発行人◎高田かつ子 編集人◎青山富士夫 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

縄文人が太平洋を渡った

メガーズ博士滞日十日間の軌跡

アメリカ、スミソニアン博物館の研究者ベティ・J・メガーズ博士（74歳、文化人類学）は、十月二十六日来日、二十九日には、ジョン万次郎の故郷である土佐清水市の「足摺巨石文化シンポジウム実行委員会」の招きで、現地のシンポジウムに参加され、ついで十月三十一日には、発掘が進む青森県三内丸山遺跡を視察、二日には東京永田町の憲政記念館において公開講演、続く三日には東京で日本側の各専門学者と学際的討論会に臨み、翌十一月四日、日本側の厚遇に感謝しながら帰国の途につかれた。今その精力的な足跡を、回顧してみる。



メガーズ博士、11月3日の討論会で

黒潮の洗う岬で

土佐清水市では、到着直ちに一帯の巨石文化構築物を視察しながら、同地出土と伝えられる土器の断片を凝視される。翌二十九日午後からは、足摺巨石文化シンポジウム（実行委員長畑山昌弘氏）に臨まれ、博士が一九六〇年代の前半、亡き夫エバンズ氏とともに、南米エクアドルのバルデビア遺跡から出土した土器片が、日本の縄文式土器によく似ていることに着目、来日して調査を重ねた結果、九州曾畑遺跡その他の土器とよく対比されることを見い出

された。ここで対比スライドを十例以上映写説明、これが「新大陸」で独自に生まれ発展した形跡が認められないことから、縄文土器の伝播であることを立論された。その経過を順を追って丁寧に説明されたのが講演の主題であった。

続いて古田武彦氏は、メガーズ博士が、日本到着以来、直ちに、コロンビアの新しい遺跡から出土した土器が中部関東の縄文中期の土器と類似するのではないか、などと目を輝かせて興味を集中されていることなど、博士の若々しい学問的情熱に感銘する言葉が述べられたのち、持説の「魏志倭人伝」中の侏儒国を足摺に比定し、そこから船行一年の裸国・黒蘭国を南米西海岸とする論拠の説明があった。さらに、アメリカと日本と、別々に提起された説の結論が一致することの意義についても強調された。

続く、京都造形大学の渡辺豊和教授は、自ら建築史家としての芸術的見地からの意見であることをことわったのち、足摺の巨石は自然をベースにした構造物として世界最大規模のものだと判断される。縄文人は現代からは想像できないくらい直感力に優れ、夢を見る力が備わった人たちであり、その力を応用して、巨石構

深謝の言葉

古田武彦



今回、十月二十六日から十一月四日に至る、メガーズ博士（エバンス夫人）の御来日につき、多くの皆様方の御支援により、無事に、絶大の学的収穫を得るに至りましたこと、心から御礼申し上げます。

すでに明らかにされていたように、南米のミイラの寄生虫（ブラ

ジルの共同研究）や遺伝子・ウイルス（がん学会の報告）の研究等

から、エバンス夫妻・エストラダ氏の学説は無視しがたくなって

きました。その上、今回明らかにされたことは、一にエクアドル・コ

ロンビアの出土土器類が、アメリカ大陸（北・中・南米）の諸土器

群の中で「孤立」していること、二はこれと「類似」する日本の縄

文土器群の方は一万二〜四千年前からの伝統をもつのに対し、南米

の土器（エクアドル・コロンビア）には、そのような伝統のないこと、この二点です。

さらに、欧米の「反エバンス」

説の学者たちが「アマゾン流域、原始土器起源」説を唱えたのに対し、夫人は当領域の研究調査を永年つづけ、その結果、当領域にその痕跡の存在せぬことを立証された。「わたしは、アマゾンの専門家です。」と言い切られた言葉に感動せざるをえませんでした。

事実、高知県の中村市から土佐清水市へ向かう途次、つづら折の道でわたしたちが「車酔い」しかけていても、高齢の夫人は毅然として動ぜず、アマゾン奥地をジープで踏破し抜いた歴年の面目躍如でした。

青森市の三内丸山でも、岡田康博さん（教育委員会）との「論争」は、そばにいたわたしたちの胸を打つ気迫がありました。青森市民古代史の会の方々の暖かいもてなしと共に、忘れえぬ一日となりました（十月三十一日）。

十一月三日、御帰国の前の日に行われた「縄文ミーツイング」（全

日空ホテルにて）も、各界の学者と共に白熱の長時間討論が行われ、先記の論証と共に、コロンビアのサン・ハシント遺跡出土の土器の写真を多数提示されました。一見「火焰式土器」とも、部分的に類似性（文様等）をもつものですが、六千年前の遺跡とのこと。新しい関心の的のようにも見受けられました。

ことに、十月二十九日のシンポジウム（土佐清水市、市立市民文化会館）と十一月二日の記念講演（東京、憲政記念館）において、一般市民の前に、スライド展示によって四十年來の自説を凜然と述べられた姿勢は、まことに印象的でした。

さらに、記念講演会において和田家伝来の古代神像等が「近世国際交流」のしるしとして、展示されました。今回の夫人の来日がジョン・万次郎の国際交流を記念するものだったからです。（たとえば、当日展示されたパピルス二点は「十八世紀後半」のもの、とされています。秋田孝季による将来。）もちろん、わたし自身にとっても、エバンス学説の真实性の立証は「他人ごと」ではありません。

なぜなら、それは同時に「裸

造物を一種の光通信の拠点としたものであろう」と、それこそ芸術家らしい夢に満ちたお話があった。

冷雨の三内丸山で

十月三十一日、三内丸山の視察では、青森市民古代史の会会長藤本和夫氏も終始同行された。同氏の感想によると、午前十一時過ぎ青森空港到着から、四時三十分同地離陸まで昼食を挟んで約五時間は、あまりにも短時間に過ぎたことが残念であった、とされる。それでも、冷雨の中、発掘現場では大量の土器片の堆積を前にして、「単なる捨て場にしては、一つ一つの破片が大きすぎる（約10cm四方）。何か別の考え方はできないだろうか」との問題提起があった。松原町分室では、百人もの女子補助員が、机を並べて遺物の整理修復等に熱中している様子を見て、アメリカでも例を見ないめざましい光景、として感嘆の声をあげられたという。

三内丸山では、相当数の人間が、定住した痕跡が認められることが、日本の考古学界の新しい知識として注目されている。これに対してメガーズ博士は、アメリカ大陸での経験では、狩猟採集時代の古代人は、短

国・黒歯国、南米（西岸部北半）説が「虚」ではない、その一事を裏づけるからです。わたしのこの説が二十四年前『邪馬台国』はなかった』（現、朝日文庫）で提唱されたとき、万人の目にそれはいかにも「奇矯の説」と見えたでしょう。



三内丸山を視察するメガーズ博士と古田教授

期間で移動する場合は、住居は放置したまま去り、新しく同じ所へ来た時は、また新しい住居を建てている例がある。そういう点から、柱穴の数と定住との関係は、別の角度から考えてみる必要もあるのではないかと、との疑問も出された。

これに対して発掘主任の岡村康博さんは、「単に柱穴だけではなく、宗教的な意味を持つ巨大建物、排水溝、長期間を要するヒスイ・ウルシの工房など、定住を推測される数々の施設があることなどから、定住地と考えられるとの説明があった。両

けれども、寄生虫やウイルス研究から「日本列島・南米」間の人間同志の濃密な関係が立証された今、さらに綿密・周到にして実証的・論理的なエバンス学説の真実性が学問的大地に根をおろすとき、いつまでもこれを「奇矯」視することができましようか。倭人伝の「裸国・黒歯国」認識は、当然ながら「縄文以来の認識」の反映と考えざるをえないからです。

このように「裸国・黒歯国」に関するわたしの認識が正しかったとすれば、それは必然的に「二倍年暦」と「短里」に関するわたしの認識もまた、正しかったことに

なります。というのは、後者（暦・里）を前提にして、前者は成り立っているからです。そして「女王国、博多湾岸周辺」説もまた、同一論理、同一運命の一環なのです。

それらもやがて、すべての人々の認識となる日が必ず来ると思います。

貴重な人生の一日を割き、遠近より貴重な御寄付を賜わり、十日間に深い御苦勞をいただいた方々、そのすべての方々に向かって、ここに心から言い尽くせぬ感謝の言葉をささげさせていただきます。

一九九五、十一月二十日



者のやりとりはなかなか熱のこもったものであり、この討論をさらに深めれば、今後の考古学界のためにも、有益な知見が得られたものであろうが、時間に迫られて、論議途中で打ち切りとなったのは、残念であった……とは、藤本和夫さんの感想である。また出土土器等の年代判定については、炭素14による測定は行われたかと確かめられ、まだ行われていないとのことであったので、やはり文様や様式だけで年代を判定することには、やや不審気な面持ちを浮かべられたようであった。

こののち、わずかな時間を利用して、古田武彦氏の熱心なすすめで、近くの小牧野遺跡のストーンサークルを見学、四時三十分青森空港より帰京される。

盛大な東京講演会

十一月二日午後一時よりは今回訪日のメインイベントとも言うべき、東京永田町憲政記念館で古田武彦氏と共に講演会。会場には十八世紀の末、秋田孝季が幕府の命により、エジプトよりもたらしたと伝え

られる古美術も展示された。ジョン万次郎と同じく、近世末期の日本の国際交流を記念してとの、古田武彦氏の発想に基づくものである。

メガーズ博士の講演は、土佐清水市の場合と同じく、エクアドルのアマチュア研究家エストラダ氏より縄文土器に似た土器が出土するとの通報を受けてから、ついにそれを日本からの伝播であると確信されるに至るまでの詳細な研究経過の説明であった。特にスライドをたくさん映されて、両者の間の、装飾や技法にどのような共通点が見られるかを、具体的に述べられる。

ところで、縄文土器がエクアドルの地に渡ったという説を提起するからには、次の四つの条件が必要と考えられる。まず第一に両所が大略似たような文化の発達の段階にあること（五千年前の九州沿岸とエクアドルの海岸のように）。第二に、唯一の要素だけではなく複合した類似点が見い出せること（先にスライドで説明した土器模様と作り方の技法のよ）に、第三に、影響を与えた方が、より古くからの伝統を持つこと（日本の縄文土器は少なくとも一万二千年前から始まっている）、第四に、伝播のルートがあり得ること（すなわち太平洋を渡る航海ということ）、

以上である。

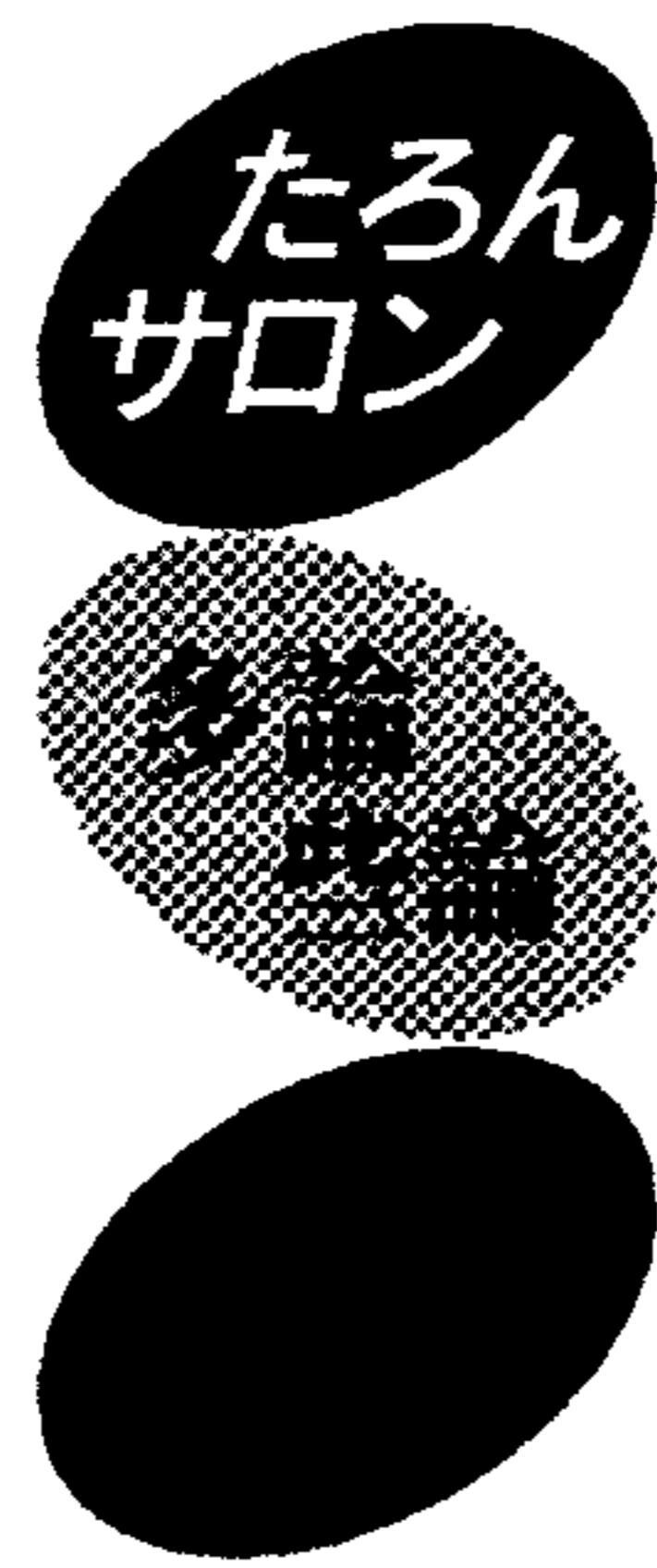
「私たちの説に反対する人は、今から五千年も前の段階で、太平洋を生きて渡ることのできる構造船などあるはずがないことを第一の理由に挙げられた。ところが、一九八〇年東京のプロジェクトによる第三野性号の実験がその反対が成り立たないことを証明しました。その実験には、今から五千年前ごろのものとして目されるダブルカナールがモデルとして使用されました。下田を出航したその船は潮流と風の力で二か月たらずのうちにサンフランシスコに到着し、さらに二か月を経てエクアドルまで行ったのです。」博士はそう説明したのち、「ジョン万次郎は太平洋でアメリカの捕鯨船に救助されましたが、もし救助されなかったとしたらアメリカの西海岸に流れ着くことになったのではないでしょうか。」と暗示的な発言を重ねられた。最後に博士は、「私は人類の文明がここまで進歩することができたのは、人間が、他の地域や他の人種の中で発展した文明を学習してそれを学び、さらに個性的に発展させる能力を持っていることによると考えています。」そう力強く結ばれたのが、博士の人類学者、考古学者としての哲学であるように見受けられた。(なお当日の講

演の詳細は、それに続く古田武彦氏の講演と共に、近日、原書房より出版される予定になっています。)

学際的な討論会

続く十一月三日には、午前午後を通じて、メガーズ博士、古田氏、大貫良夫氏(東大理学部教授・人類学)、田島和雄氏(愛知がんセンター疫学部長・遺伝子)、鈴木隆雄氏(老人総合研究所疫学室長)らで研究懇談会が行われた。それぞれ異なる専門分野の研究者が、一つの課題

をめぐる意見交換が行われたことはいわゆる学際的研究の試みとして異例の意義深い成果があげられた。出席者からは、引き続きこのような機会を作りたいとの強い希望の声も出された。討議の内容は、前記原書房出版の本に収められる予定になっている。当日火急の都合により参加が不可能になった増田義郎(東大名誉教授)、小林達雄(国学院大学教授・考古学)の両氏も、その本では誌上参加される予定とのことである。(記・青山富士夫)



会員のページ

筆者はいずれも本会会員

津軽北端のアイヌ語地名

東京都大田区 阿久津 恒也

青森県西津軽郡森田村の石神遺跡に隣接して狄ヶ館溜池がある。この狄は一字でエゾと読み、蝦夷のことである。古書に夷狄、北狄などの文字を見ることがあっても、実際の地名に使われている例は少ない。私の知る限りでは外に岩手県盛岡市矢

幅町の床丹城址北にある狄ヶ森古墳だけである。床丹城は紫波城が洪水を受けやすく、弘仁四(八一三)年に征夷将軍・文室綿麻呂が蝦夷防衛のため築いたものであり、狄ヶ森古墳は蝦夷塚の一つである。東北北部には蝦夷(アイヌ語族)に関連す

る地名が多くある。

青森県内におけるアイヌ語地名は、昨年発掘されて一躍有名になった縄文前期末からの大遺跡、青森市・三内(さんない)丸山遺跡の三内をはじめ数多くある。特に北海道に向かい合う津軽半島には、外ヶ浜から竜飛岬に至るまで、津軽海峡沿いに連続して並んでいる。もちろん、竜飛の地名もアイヌ語の「タムパ」(刀頭)を語源とする「タプ」(円頂丘)らしい。近世までアイヌ語を話す人々が居住し、藩主にオットセイを献上したりしていたといわれる。

『津軽一統誌』の狄(アイヌ) 戸籍

津軽藩の藩史『津軽一統誌』(青森県史編纂委員会編/復刻・歴史図書社)には、十三湊の記録、『十三往来』が載っている。書かれた年代は不詳だが室町期(一三五〇年)ごろとされ、「滄海漫々トシテ夷船京船群集シテ艦先ヲ並調触湊ニ市ヲ成ス」(原文は漢字記述)とあり、山王坊が著したものとされる。異本のなかには「夷船唐船」とするものもある。

この『津軽一統誌』には、津軽半島北部に居住するアイヌ語族の戸籍が載っている。寛文九年(一六六九)九月の終わり近くに「御領分狄之覚」

(第十卷下の中)として記述されており、最後に「右狄数合四十二軒」と書かれている。この記事が何時ごろ纏められたかは不明だが、アイヌ言語学者の金田一京助博士は、享保十六年(一七三二)以前の史料だろうと推測しており、アイヌ語地名研究家の山田秀三氏は、他の史料と対照して寛文九年か、それに近い時代と見ている。

この史料には、十五ヶ村の「狄」村名とともに四二名の名がある。名前は二人だけ「小泊村いそたいぬ」「釜の沢村まこら犬」とあり、外はすべて日本人名である。アイヌ語族を「狄」とし、名を「いぬ、または

犬」として差別している。異本に四十名の名しかないものがあるが、合計は四十二軒としている。

十五の狄村の名としては、①石崎(ホコノサキ)、②宇田(ウタ)、③五所塚(ゴシヨツカ)、④綱不知(ツナシラズ)、⑤奥平部(オコタラベ)、⑥砂ヶ森(スナカモリ)、⑦母衣月(ホロツキ)、⑧小泊(コトマリ、大泊か?)、⑨山派(?), ⑩松ヶ崎(マツカサキ)、⑪六条間(ビクジヨマ)、⑫藤嶋(フジシマ)、⑬釜の沢(カマノサワ)、⑭宇鉄(ウテツ)、⑮竜飛(タツヒ)で、現在でも使われている地名があることは注目されてよいであろう。

多元の会・関東主催

新春恒例 古田武彦氏講演会

日本の縄文国家と韓国の「三種の神器」
エバンズ夫人との輝く十日間のあとに



古田武彦氏は十一月下旬の数日、韓国南部の最新の遺跡遺物を調査され、その成果を踏まえての講演です。どんな新解釈が示されるでしょうか。

- ▼一九九六年一月十四日(日)午後一時(開場は12時)
- ▼文京区民センター(地下鉄「春日」下車)
- ▼参加費 会員1000円、一般1500円
- ▼終了後、5時30分より古田氏を囲んで懇親会を行います。会場は同じく文京区民センター、参加費1500円(夕食付)。

この九十年後、宝暦五年(一七五五)に津軽藩が狄村をキリシタン改めした「津軽外浜後潟組狄御改覚也」という表紙の文書(青森郷土館蔵)が昭和三十四年に発見された。これには人名が全て漢字表記のアイヌ語によって記載されており、貴重な文献である。

外之上磯浜狄切死丹御改人数書御覚

この文書は、津軽北浜の狄村を所管していた後潟の代官所が、藩に対する報告書の控えであった。これ以後、戸籍調査は行なわれていないので、江戸期における最後の戸籍調査であった。天明(一七八一〜九)年間に「蝦夷人の詞仮令にも唱る事禁」ずるアイヌ語禁止令が出され、「蝦夷産木皮衣着用も禁」せられ、アイヌ語族の同化政策が急速に推進されているので極めて貴重な記録である。寛文には十五ヶ村、四十二軒であったが、宝暦には村数が約半分の八村に減少している。しかし、戸数の方は三十九軒であり、ほぼ変わりが無い。宝暦調査では戸主名が漢字表記のアイヌ語で書かれ、人数は男一一人、女一一人、合計は二三人と記されている。三十九軒中、戸主二十七名に対し犬がつけら

れており、アイヌであることを明らかにし、差別表示が前面に出ている。

江流末郡と安藤氏との関連など

先述の「十三往来」は南北朝期の十三湊の景観を描いているが、そのころは安藤氏の支配時代である。十三湊は江流末郡に属していた。アイヌ語でエルマとはエンルム(鼻)の訛りと考えられ、岬のある地域を指し、十三湊の十三(トサム)とは「湖・畔」を意味しており、南にある車力(シヤリキ)とは、サルキ(葦・葎)の生える低湿地である。十三湖に流れ入る岩木川畔から眺める岩木山の姿は美しい。その岩木山はアイヌ語でいう「カムイ・イワ・キ」(神・住む・所)だと思われる。ところで、『新撰陸奥国史』(青森県文化財保護協会編)には「岩木山は古阿蘇部の森と号す。夷賊妖魅の巢窟」と書かれ、また、深浦が安藤浦と呼ばれていた記事も載っており、さらに安藤(東)氏が「十三湊日之本將軍」と称していたとも記されている。

アイヌ語地名と古史古伝を相関させ、幅広く理解することにより、新たな視点から津軽の歴史を見直してみたいと考えている。

「アラハバキ」を探す

3

小金井市 鴨下 武之

◇多摩川流域のアラハバキ

今回は「武蔵国二の宮」と「新編武蔵風土記稿（以下、風土記稿）」で、唯一多摩川流域の「アラハバキ」を記述している「養沢神社」を紹介する。

◇二宮神社

二宮神社は、あきる野市（九月から秋川市と五日市町が合併）の東端、秋川と多摩川の合流点近く、五日市街道を上がった所にあり、七月の生姜祭りは有名である。

古くは小川大明神といわれていた。「延喜式・和名抄」に多磨郡小川郷の名が見え、小川の牧がこの地にあつて、朝廷に馬を献上していたとある（秋川遺跡散歩・秋川市発行）。

「風土記稿」では、二宮村の「二ノ宮明神社」で、「社領十五石の御朱印を附せらる」とある。御朱印の社といえ、格段のステータスである。「祭神は国常立尊、田原藤太の勸進と伝え、古は社も莊嚴なりしにや」とあり、「社地から布目瓦、甕、その他、色々出土する」といつている。

境内および周辺からは、旧石器から縄文、弥生、古墳、奈良・平安時代の寺社建築の鴟尾や円瓦など、さらに鎌倉から江戸時代に至るまで、連続した出土品が発掘されており、これらの一部は、神社協の「二宮考古館」に展示されている。ここに丹下左膳ふうの（片目を切り裂いた）土面がある。

しかし、不思議なことに、祠から石神まで克明に記述する癖がある「風土記稿」で、この末社については、全く触れていない。探訪に行つたのは五月であつたが、実際には、本殿の裏に色々な末社があり、それぞれ立派な標識がある。由緒書には「荒波々伎神社」とあり、「荒脛巾」などより好感が持てるが、その標識はなく、以前の記憶で、藁草履や草鞋が掛つている社を探したが、分からなかつた。

結局、氏子の方に案内して頂き、それは街道から女坂を上がつた入口にあつた。同行した家内が「やはり門番だ」と憎まれ口を叩く。社は小さいが、トタン葺の「一戸建て」である。大宮氷川神社の門客人社の立

派な社殿は例外として、「一戸建て」は非常にめずらしい。隣に掲示板のようなものがあり、掲示面全体に鍵型の釘が植えられていて、そこに指先位のブローチの草履が一つ付いていた。良く見ると、スリッパの袋に入れた、スリッパやサンダルも吊してある。

写真を撮るとき、氏子の方が考古館々長の坂上先生に「荒波々伎神社」の短冊を書いて頂き、セロテープで貼つて下さつた。何故標識がないのか、お尋ねしたが、「最近ではアラハバキのことで、学者が争つていきますね、サンデー毎日を見てびっくりしました。」と言われる。それが標識がない理由か、どうか分からないが、やはり心に残る問題である。

九月に阿久津氏（多元会員）と再訪問したとき、坂上先生から「二宮鑑」という享和二年（1802）の文書を見せて頂いた（風土記稿は1828年）。これによると、末社は天照皇大神宮、牛頭天王、山王社、天馬大自在天で、内二社は現在もあるが、荒波々伎はない。先生のお話では、『明治に他所から勸進されたのではないか、また、昭和二年に拝殿を新築したとき、荒波々伎社も新しくしたようだ。』とのことであつた。家内が買ってきた子供の藁草履

を、社の脇に吊した。せめてもの目印であるが、やはり標識がないと、各所の荒脛巾社のように、やがては、何だか分からなくなつてしまふ。

余談だが、「考古館」の片目を切り裂いた土面は、縄文中期のものであり、谷川健一氏の「青銅の神の足跡」以来、片目の神は、金属の神が定説となつた。近江雅和氏は「隠された古代」で、「製鉄民」片目の神「アラハバキ」と結び付けている。もし、縄文土面が製鉄に結び付くのなら、縄文時代に製鉄があつたこととなり、考古学の定説とは矛盾する。考古学者は、どう答えるのか、興味のあるところである。

JR五日市線東秋留駅から近く、周囲に古代遺跡も豊富にあるので、一度は訪れることをお勧めする。

◇養沢神社

「風土記稿」には、「門客人明神社」と書いて、アラハバキと仮名が振つてある。祭神は門の神である、豊盤間戸、櫛盤間戸命（トヨイワマド・クシイワマド）とある。

なお、この社は柳田国男の「石神問答」にも次のように登場する。『客人明神社は……、東京にては芸人、料理屋などの信仰する所に候へども、……武蔵には「荒脛社」と称

する由来不明の小社数多く候処、西多摩郡小宮村養沢のアラハハキのみ「門客人明神社」と書くよしに候」とあり、これらの神については「本地に関する紛々の説之れ有り候へども、悉く信ずるに足らず」と言っている。

場所は、五日市駅から養沢行きのバスの終点で、大岳の鍾乳洞から大岳山に向う道と、養沢の鍾乳洞から御岳山に登る道の分岐点と言え、奥多摩の山歩きをした方なら、ご存じのことと思う。阿久津氏が「五日市の三内」の調査のあり、痕跡として「門客人明神社」と彫った石灯籠が残っていることを聞いたので、二人で探訪に行ったわけである。

神社は旧郷社としては、整ったた

たずまいで、社殿の裏側の小高いところに、その石灯籠が一本だけ立っていた。文化十二年(1815)の建立とある。祭神は、養沢神社になつたとき、変わってしまったが、その揭示はない。驚いたのは、鳥居と狛犬の間に、高さ五米はあるかという、不気味な登り竜の石像が左右にあり、十年前に土地の人の夢枕に現れたままの姿を、石に彫刻させて寄進したとのことであった。

昼間はバスの便がほとんどなく、不便なところだが、御岳山をケーブルカーで登り、ロックガーデンから養沢の鍾乳洞経由で、降りるハイキングコースもある。



六月肺出 それはハレー彗星か

東京都中野区 影山 星二

「法隆寺は移築された」(米田良三・新泉社)をたいへん興味深く読ませていただいた。建築などにはずぶの素人の私にも判りやすい解説で、法隆寺は太宰府の観世音寺を斑鳩に移築したものであると説く。

但し、この書の中心なテーマ、「法隆寺の移築」とは関係が薄いとおもわれるが、明らかな誤りがある。「六月肺出」(61ページ以降)が

それである。



法隆寺金堂の天井の鏡板の一部に「六月肺出」(肺は彗星)という戯書があり、これは絵師が実際に彗星を見て記録したものである。工事は一五年以上の長期に亘っているが、天井の彩色工事は工事完成の一、二年前に行われており、「六月肺出」の戯書は観世音寺の完成直前

ハレー彗星近日点通過日			記録のある国名・出典	
B.C.	240	III	30.5	中国(史記・秦始皇7年)
〃	163	I	20.0	中国(漢書・文帝後3年)
〃	87	VIII	2.5	中国(漢書・武帝後元2年)
〃	12	X	5.5	中国(漢書評林・元延元年)
A.D.	66	I	26.5	中国(統漢書・永平9年)
〃	141	III	20.0	中国(統漢書・永和6年)
〃	218	V	17.5	中国(同上・建安23年),ギリシア
〃	295	IV	20.5	中国(晋書・元康5年)
〃	374	II	16.0	中国(晋書・寧康2年)
〃	451	VI	24.5	中国(宋書・元嘉28年)
〃	530	IX	25.2	中国(魏書・永安3年),ヨーロッパ?
〃	607	III	13.0	中国(隋書・大業3年)
〃	684	IX	28.5	日本(日本書紀),中国,ドイツ
〃	760	V	22.5	中国,ヨーロッパ
〃	837	II	27.5	日本(続日本後紀),中国,ヨーロッパ
〃	912	VII	9.5	日本(日本紀略),中国
〃	989	IX	9.0	日本(同上),中国,朝鮮
〃	1066	III	23.8	日本(扶桑略記),中国,朝鮮,ヨーロッパ
〃	1145	IV	22.0	日本(本朝世紀),中国,朝鮮,ヨーロッパ
〃	1222	X	1.5	日本(吾妻鏡),中国,朝鮮,ヨーロッパ
〃	1301	X	23.38	日本(北条九代記),中国,朝鮮,アイスランド
〃	1378	XI	9.02	日本(愚管記),中国,朝鮮
〃	1456	VI	9.1	日本(師郷記),中国,朝鮮,イタリア(?)
〃	1531	VIII	25.8	日本(公卿補任),中国,朝鮮,ヨーロッパ
〃	1607	X	27.56 *	日本(同上),中国,朝鮮,ヨーロッパ
〃	1682	IX	15.27 *	日本(堯恕法親王記),中国,朝鮮,ヨーロッパ
〃	1759	III	13.05 *	日本(本朝天文志),中国,朝鮮,ヨーロッパ
〃	1835	XI	16.44 *	日本(新修彗星法),中国,朝鮮,ヨーロッパ
〃	1910	IV	20.18 *	世界各国
〃	(1986)	II	9.67 *	予想

*はグレゴリオ暦、他はユリウス暦で示す

に書かれたものであろうとしている。

この彗星をハレー彗星として六一七年の六月か七月に出現したとするのである。

その根拠は、ハレー彗星の最近の出現は一九八五年の一二月から翌一月、フィレンツェの画家ジョットが絵に描いた彗星は一三〇一年九月一五日から四十五日間、その間隔は六八四年(七六×九)と九〇日である。ジョットが見た時から六八四年と九〇日さかのぼると六一七年の六月から七月に当たるとしている。

またハレー彗星の周期は七六年と一〇日であり、五四一年は三月から四月、六九三年は九月から一〇月(月については、いずれも単純な計算ミスであろう)となるとしている。



また『三国遺事』の眞平王代の融天師彗星歌という物語がある。これは眞平王の近侍が山遊びをしようとした時に彗星を見たという話で、この時融天師が郷歌を作った歌うと、怪星(彗星)はただちに消えてしまひ、日本軍も本国にもどつていつて、かえつてめでたいことになつ

た、という物語である。

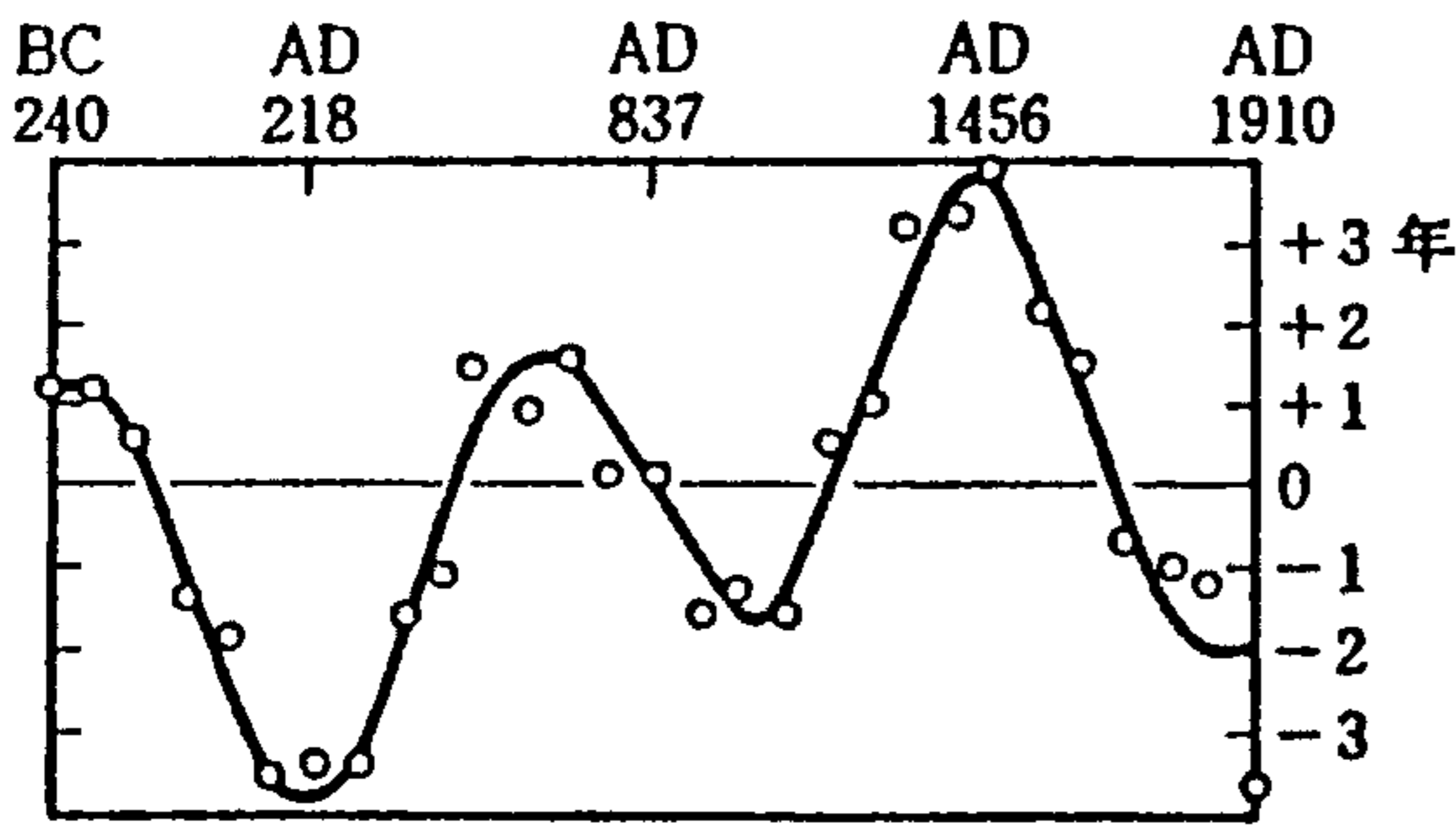
真平王の治世は五七九年から六三一年であり六一七年を含む。山遊びをするのは初夏と思われ、六一七年の六月にハレー彗星を見た記録である可能性は大きいとする。

ハレー彗星の過去の記録については『星の古記録』（斎藤国治著・岩波新書・一九八二年初版）に詳しく解説されている。以下この書によって記述する。

天武十三年秋七月二十三日壬申（六八四年九月七日）彗星西北に出ず。長さ丈余（一〇度以上）。

中国にも旧唐書天文志にこれに対応する記録がある。

唐の文明元年七月二十二日（六八四年九月六日）西方に彗あり。長さ丈余。凡そ四十九日にて（一〇月



【2000年にわたるハレー彗星の回帰周期の変動】

二四日）滅す。

ハレー彗星は平均七六年余りで帰するから、六八四年は一応ハレー彗星出現年として考えられるが、この年には陰暦七月、九月、十一月と三回も彗星出現の記録があるので、そのうちどれがハレー彗星であるか確定する必要がある。ハレー彗星の過去の軌道については多くの研究があり、その軌道決定の定数により六八四年の彗星の軌道計算ができる。その計算軌道と西方に見え四十九日で消えたという記録がピッタリと合致することで、陰暦七月の彗星がハレー彗星であると確認できるのである。

ハレー彗星はその本体が比較的軽いので、惑星の軌道を横切るとき、たまたま惑星が近くにいと、その引力によって彗星の軌道は曲げられ周期は変化する（このような力学的影響を「摂動」という）。

ハレー彗星の過去の記録から回帰の平均周期は七六・九二年となり、これまでの出現間隔と平均周期との差をプロットすると上図のような曲線となる。図の横軸の値は前二四〇年の出現から、最近の一九一〇年の出現までの年代を示している。

また、以上のような確認作業をへ

て、たしかにハレー彗星と思われるものを挙げると前ページ表のようになる。

これによると、六一七年陰暦六月にはハレー彗星は出現していない。最も近いのは六〇七年太陽暦三月一日である。

「六月肺出」も融天師彗星歌もハレー彗星でない彗星を見ていたことになる。観世音寺の建築時期の推定はハレー彗星の記録からでは不可能である。

舒明六（六三四）年の秋八月、七（六三五）年の春三月にも彗星の記録があるが月が違う。「六月肺出」

と「融天師彗星歌」がおなじ彗星であるとすれば、五重塔の心柱の年輪年代測定による五九一年以降から真平王の治世六三一年までの或る時期なのかも知れない。

始めに述べておいたように、以上

のことは観世音寺の建造に関することとで、この書の本題の法隆寺の移築に関連する事ではない。筆者の指摘によって『法隆寺は移築された』の書の価値が損なわれることはないと思うが、事実として誤りを指摘させていただいた。

関連いだらけの歴史教科書／ 秘められた日本古代史1000の謎

齋藤 忠 著

株式会社青年会館発行 1480円

横浜市 安藤哲朗

序文に表明されているように、歴史教科書が、議論が多くいまだ確定していない歴史事件に対し、「確定的に」記述し、異論の存在を無視していることに対し100箇条を挙げて糾弾している本である。因みに著者は高名な考古学者とは同名異人で、38歳のフリージャーナリストである。なお「教科書の記述に対する反証の多くは、古田武彦氏の九州王朝説をベース」とあるよ

うに、九州王朝のみならず、縄文から古墳までほぼ古田氏の所論を祖述されている。一部には独自の蘇我氏論・平安遷都論・

天武天皇九州王朝派遺論など興味深い論点もあり、その論拠をじっくり書いてあったら、それはまた楽しい本になったと思われる。なにしろ一項目一頁〜二頁なので「異論」者の多くには名前にも触れていない。その点、今後の展開を期待したい。

定例活動の報告

富永長三

10月の発表と懇談の会

天孫族はどこから来たか

会員白名一雄氏から表題の発表があった。記・紀、万葉、風土記その他を材料に長時間にわたるものであった。以下は氏のメモの一部である。

天孫族は「記」によれば常世から来ている。灰塚照明氏、植佐知子氏らによつて発表された、北九州三十数ヶ所ある文字神社（常世の思兼命）、思兼命が齋らした阿波文字（神代文字の一種）、少彦名の処方オリエント起源等が、その徴証である。植佐知子氏によれば、少彦名の処方の寄生木、スクナヒコノスクネ（木藪、石藪）はケルトのドルイド（聖職者）が神聖視していた聖木であり、少彦名が着て来た鷓鴣（ミソサザイ）の羽の鷓鴣もドルイドの聖鳥である。少彦名は上陸した時、言葉が通じなかったが大国主とは通じており、紀の国から常世へ帰っている。また大国主の帝釈天の処方は、インド原産シクシン科ミロパンの実と、インド及びマレーシア原産の檳榔の実を使用する。「紀」によれば、常世は万里踏浪し、遙か弱水の先にある。多遲摩毛理は非時の香木実を持ち還るのに往復十年もかかっている。常世が同じ季節が続く風土を指している語感から、また西江雄児氏の非時の香木実バナナ説からも常世は南方の常夏の地域と推定され、ズバリ南インドではなからうか。証拠は大野晋氏の指摘の如く、基礎語の夥しい規則的音韻対応、仏教公伝以前のインドとの交流の数々の痕跡等々圧倒的であり、交流は更にその先、シュメール、ヘブライ、ケルトにまで繋がっている気配である。降臨は何波にも亘り、直接渡来だけでなく、寄り道をし、何世代もかかって到来した気配である。（以下長文なので残念ながら省略させていただきます。）

11月の発表と懇談の会

「会津古文書」と「東日流誌」の共通点など

会員鴨下武之氏が首題の発表を行った。これは、「東アジアの古代文化を考える会」で、野田明氏が発表

した内容を整理紹介するもので、*印は鴨下氏のコメント。

1. 伝承の共通性

(1) 安日・長髓彦伝承

「会津四家合考」(1662)等に、『神武帝が中国に侵入の時、摂州を領する宇摩志摩治命は胆駒嶽で迎撃した。神武帝勝利後、反抗軍の安日、長髓兄弟のうち、長髓は帝の兄を射殺した罪で殺され、兄の安日は津軽率土浜安東浦に追放された。』

「東日流外三郡誌」(1794)にも同様な記述があるが、長髓彦は負傷した後、津軽に到着している。これらは会津の資料が、隣国三春藩に影響を与えたものと考えられる。

(*菅江真澄の「外浜奇勝」にも同じような伝承が、津軽のものとして出ているので、必ずしも会津資料の影響とも言えないが、今後、幅広い調査の必要がある。)

(2) 仏教伝来の伝承

「会津旧事雑考」(1672)等の古文書によつた、北篤氏の「謎の高寺文化」(1978)には、『欽明天皇元年(540)梁の僧青巖、奥州会津蟻川荘の根岸村に来て、高寺を建立した。惠隆も梁惠志の弟子で、三十年後に、高寺へ来て再興したので、惠隆寺と呼ばれるようになった。』とある。東日流誌にも、未公開の「奥州陰誌大要・奥州仏法之事」に同じような記述がある。

た。』とある。東日流誌にも、未公開の「奥州陰誌大要・奥州仏法之事」に同じような記述がある。

2. アラハバキ神について

(1) 「金光明経」のアラハバキ

会津地方にアラハバキがあるのは、青巖が持参した経典に、「金光明経」があったためとする。この中に、「堅牢地神品」の経典があり、「堅牢地神」の梵名はパーリ語で [ALAVAKA] で、これが「アラハバキ神」である。この女神は、「大地の神・地主神」そのものである。これが、津軽地方に伝播し、荒吐神、荒覇吐神等々と呼ばれたと理解している。

(*小生は「アラハバキ」が、特に武蔵に密集している(残存している)ことに、関心を持って調べているが、「大地の神・地主神」とすることには異存はない。)

(2) 大元さん信仰とアラハバキ

真言密教の「太元帥明王」の梵名が同じくパーリ語で [ALAVAKA] であり、一方、大元さんと呼ばれる信仰の御神体には三石集合体が多い。ここから、この石神信仰がアラハバキ神とする説がある。しかし、「太元帥明王経」が伝来したのは、9世紀中頃であり、それをアラハバ

キの起源とするには遅すぎる。

(*古田先生の提唱される『縄文ストーンの公理』が、後世に「大元さん」等の信仰に変化したものとするれば、これを追うことにより、『縄文ストーンの公理』の分布・密度等を解明する手段として有効ではなからうか。)

万葉集と漢文を読む会

「大君の みことかしこみ かな
し妹が 手枕離れ 夜立ち来ぬか
も」

東歌中唯一の「おほきみ」の歌だ。その大君の命令によって夜立ち

して来たという。古来この歌は防人歌と解釈されてきた。(東歌には五首の防人歌があるが、この歌を含め、他に数首から十数首をそれとする説がある。)

いずれにせよ、夜立ちを強いる状況、とりわけ東国の政治状況、その時代はと、大君の問題とも絡んで常

関東史跡散歩の会に参加して 仏具はただの宝物？

小金井市 齊藤里喜代

十月十五日、男性十二人、女性二人の総勢十四人が高崎駅に集合。バスで群馬県立博物館のある、群馬の森に向かった。博物館では、女性館員が一時間弱をかけて、古代史を中心に説明をしてくれた。圧巻は、太田塚回り四号墳のハニワ群と綿貫観音山古墳出土の数々の副葬品で、両方とも重要文化財。綿貫観音山古墳の石室が未盗掘だったのは、設計ミスで、右壁の石積みが天井の重みで崩れ、天井石が斜めに石室内に落ち込んでいたせいだという。

立派な銀装の太刀と鞘の先飾り、金銅製巾広ベルト、私が一番気に入ったのは、金色に輝く睡蓮の花のような、金銅製花卉付鈴。他に

水瓶(重要文化財)等あり、仏教が関東に伝わっていない六世紀後半の観音山古墳にある仏具ということ、単に宝物として副葬されたという説明でした。

博物館前の芝生でお弁当を食べ、歩いて不動山古墳に向う。前方後円墳で河原石の葺石がある。後円部頂きに不動様を祭ってある。裏に縄掛突起付舟形石棺が展示してあり、説明の終りに、なぜか南朝文字とある不思議な文字が一行記されていた。

近くの綿貫観音山古墳は全長九十七米で、公園として整備されており、これでレプリカのハニワを元の通りに立てていくれたら言うことなしでした。二段築成の上段に横穴式石室の入口が開口していた。管理人に鍵を開けてもらい中に入った。富永さんが事前にお願いしてあったのだ。足元に一つ明りがあったが、懐中電灯で照らす

と、石を積み直した証拠に赤いチヨークや黒い番号が石についていた。石棺はもともとなく、下に敷いた河原石に直葬したらしい。

次は大鶴巻古墳と小鶴巻古墳の二つの前方後円墳へバスで行く。大鶴巻古墳は五世紀前半で、前方部がぐんと低くなっている。前方部は桑畑になり、後円部は頂上の木々を利用して、四角い空間に綱を張っていた。発掘をするのだからかという声が聞こえた。小鶴巻古墳は六世紀前半と見られ、隣接する大鶴巻と同系列の被葬者と考えられるそうだ。

全長百七十一米の浅間山古墳は全長百二十三米の大鶴巻古墳と同じ設計で造られているようだ、似た墳形をしている。浅間山古墳を最後に史跡散歩は終り、快速アーバン号で帰途についた。お天気にめぐまれ、楽しい一日でした。

に話しが弾む。

「韓衣 裾の打ち交へ 逢はねども 異しき心を 吾が思はなくに」

この歌の「からころも」これも実体がよくわからない。いわゆる渡来人が東国へ集中することから「韓衣」という歌語は東国発信では、とする佐々木幸綱氏の説は興味深い。

『梁書』は東夷の最後「女国」を読む。慧深は「扶桑東千餘里 有女国」と云う。「身体有毛……女人胸前無乳……」と理解不明の記述。後半は「天監六年(五〇七) 有晋安人渡海……至一島……女則如中国……」と記す。

女人胸前無乳と女則如中国とはどう考えればよいのか、慧深情報はよくわからない。

次回からは『隋書』東夷列伝に入る。流求国、あるいは倭国の「開皇二十年、倭王姓阿每、字多利思北孤……」このあたりはいっ頃になるだろうか、御一諸にお楽しみ下さい。

古田ゼミナール 9月29日

縄文ストーンの公理

吉野ケ里が発掘され、塚に囲まれた遺跡の広大さにわたしたちはまず驚かされた。吉野ケ里以前は、イン

グランドのメイドン・キャッスルが世界最大の環壕遺跡とされていた。三重の壕に囲まれた23ヘクタールにも及ぶこの遺跡は、BC一世紀頃のケルト人によって造られた。その始原はBC四百年頃とされる。日本列島では弥生時代であろう。この巨大な遺跡は突然に生まれたのではない。それに先だつBC三千年頃からのストーンヘンジの時代、さらにそれを遡る五百年、ストーンサークルの時代にまで遡ることが知られている。その長期間の大土木事業の経験がメイドン・キャッスルに引継がれていた。

それでは吉野ケ里はどうか。縄文時代Ⅱ狩猟採集の時代、という過去の縄文時代観からは、突然に出現したとしか理解出来ない。しかし阿久遺跡、寺野東遺跡、とりわけ三内丸

山遺跡の発掘は今日までの縄文時代観を一変させた。まさに縄文都市国家と呼ぶに相応しい姿だ。三内丸山遺跡は縄文前期に遡る。彼のイングランドのストーンサークルも縄文時代だ、吉野ケ里の出現には、三内丸山遺跡等々の縄文の大土木事業（縄文文明）の伝統がある。吉野ケ里と直接継がるのは足摺遺跡であるとい

う。足摺遺跡には白皇山をはじめ多数の三列石がある。この系列の三列石が雷山頂上にある。男根石、女陰石、鏡岩と。吉野ケ里は突然生まれただのではない。縄文の巨石文明の伝統を引継いでいる。これを「縄文ストーンの公理」と呼ぼう、と提唱された。

後半は例によって、高田朗読を堪能した。その津保化族伝話に、突鉾をヤス、虫をブヨ、あるいは水をガ

●古田教授来春で定年退職●

古田先生が来年三月で昭和薬科大学を定年退職されます。

退職後は京都の家にお戻りになって、今まで時間に縛られて出来なかったこと、本当の勉強をやりたいんだと、自分に忠実に本当にやりたいことに全力で取り組みたいと固い決意を語られました。夢いっぱいであくわくしているとおっしゃいました。したがって具体的なスケジュールはすべて白紙ということ。ささやかながら私たちも先生の新たなお志に声援を送りたいと思います。

(高田かつ子)

コ（現代でも氷をシガコという）、寒冬をシバケ（今日のシバケルに繋がるか）等々の興味深い物名が出てくる。

お知らせ

■山田宗睦「日本書紀」講座第十四・十五回の内容報告は次号に掲載します。なお十二月、一月は同講座は休講、来春二月十一日に継続開講となります。

■中小路駿逸氏論文「天地創造」と「海」の英訳本を御本人から寄贈いただきました。エバンズ夫人にも進呈しました。御希望の方は、郵便切手240円を同封して高田会長までお申し込み下さい。

「火炎土器展」

大田区立郷土博物館

浦和市 高田かつ子

大田区立郷土博物館で十一月二十六日まで開かれていた「火炎土器展」を見ってきました。ふだんなら新潟や福島、栃木に足を運ばなければ見られないものが一

堂に集められ、写真だけでは分からない線描の確かさ、隆線文の力強さに圧倒される思いでした。見ていて不思議だったのは年代が記されていないことでした。様式によって緻密に区分されているのはさすが日本人の芸の細かさで驚嘆する他ないのですが、絶対年代の示されていない展示は妙に私を落ち着かなくさせるものでした。

それというのも、先日来日されたエバンズ夫人から見せられたコロンビアのサン・ハシント遺跡出土の土器の写真が頭を離れなかつたからです。それは5500〜6000年前の土器で日本の火焰式土器と非常に似ているものでした。日本との関係についてエバンズ夫人は調査したいとのことでしたが、日本の火焰土器は一切放射性炭素の年代測定をしてないらしいのがこの展示で分かりました。これでは同じ土儀に立って研究を進めることはできないのではないかと素人ながら心配になりました。すべての出土物は科学的に年代測定をすることを義務づける必要を痛感した次第です。

◎投稿歓迎

会員の皆様の投稿をお待ちしています。活発な御意見や、各地に伝わる未知の史料などについてもお知らせください。
〒151 渋谷区本町1-7-16 11102
「多元」編集室 青山富士夫
TEL 03(33377)7869

事務局便り

エバンズ夫人 記念行事協力に感謝

エバンズ夫人（ベティ・J・メガース博士）来日記念行事の企画を実行するにあたり、本会会員の多数の方々より、「ご寄付を頂きました。これに対して「東方史学会」より丁寧なお礼の言葉を頂いている事を」報告致します。

新入会員募集

「多元の会・関東」に ご参加ください

本会は「古田武彦氏の提唱された、歴史を多元的に観る考え方に賛同し、それを継

承発展させる事を理念として、日本の古代の真実の姿を研究」する会です。このような取組方針に賛同する方々の入会を歓迎します。

▼入会ご希望の方は、住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記の上、入会金（千円）及び年会費（四千円）を、左記へお振込願います。

▼郵便振替「多元的古代研究会・関東」口座番号「00170・9・768777」

年会費は、原則として「4月より翌年3月まで」となっております。ただし唯今より3月までに入会される方に対しては、平成8年度会員として登録しますが、会報などは入会后直ちにお届け致します。

ネットワーク情報

古田史学の会古賀達也氏より次のような要旨の訂正のお知らせをいただきましたので紹介しておきます。全文は古田史学会報に発表される予定です。

「飯詰村史」に福士貞蔵氏が昭和二十六年発表された「諸翁聞取賞帖」と「庄屋作左衛門覚書」は、ともに和名家文書による、と古賀氏は「新古代学第一集」に書かれたが、今回実は「庄屋作左衛門覚書」だけが別の家に伝わる文書によっていることが判明した。「諸翁聞取帖」と「庄屋作左衛門覚書」は飯詰高館城閣連の、ほぼ同じ内容を伝えている文書である。同じ内容の文書が別々の家に伝わっていることは、和田家文書が、単なる思いつきや偽作でない証拠となるであろうと古賀氏は推察しておられる。

博物館案内

出光美術館 12月17日まで

「北京大学サッカークラブ博物館所蔵中国の考古学展」

茨城県立歴史館 12月17日まで

「音の考古学―音具と鳴器の世界」

千葉県立上総博物館（木更津市）

「発掘された木更津の昔」

12月6日から23日まで

神奈川県立埋文センター講演会

「旧石器時代の石器」大塚健一氏

12月9日（土）午後2時〜4時

交通：横浜市営地下鉄「阪東橋」下車

EROM

「とにかく感動しました。縄文時代のイメージが一変したと言っている」三内丸山について、国立民族学博物館初代館長梅棹忠夫氏はそう言われる（11月19日朝日新聞）。新しい事実に触れて認識を新たにしている。それはそれで進歩的なことだ。だが一方、三内丸山はそれほど意外とすべきことであつたらうか◆確かに感動的ではある。しかしそれまでに、鳥浜、阿久、真脇などなどの遺跡で、三内丸山の要素はすべて出揃っていたと言っている。古田武彦氏は阿久遺跡に縄文都市の表現を用いられた。慶大教授鈴木木公雄氏も十年前すでに、縄文時代を弥生文明を引き立てる影のような存在として考える旧来の歴史認識は一新しなければならぬ、と熱烈に主張されている（歴史読本、昭和六十年十一月号）◆だがそれらの遺跡の事実は、いずれも新聞に大きく報道されながら、一般学界にはそれほど認識をもたず受け取られなかったようだ。まさに、見れども見えず、ではなかつたらうか◆ひるがえって文献史学について考えよう。漢書から旧唐書に至るまで、隣国中国の史書には大和王朝（またはその前身）に符合する事実が、どれだけ語られているか。旧唐書に至っては「倭国」と「日本国」は明瞭に書き分けられている。◆眼前の事実を、見れども見えず、の状態が教科書的歴史観の中では未だに支配的である。だがその「イメージを一変」しなければならぬ日も、いずれ近いであろう。（魁）

多元の会 カレンダー

会場は、全て文京区民センターです。

山田宗睦氏の「日本書紀講座」は、12月及び1月が休講となります。

12月 1日(金) 午後6時
古田ゼミナール 「東日流外三郡誌」の解説を進めています。

3日(日) 午後1時
発表と懇談の会 講演：高橋孝男氏「わが祖 劉邦」前漢の高祖劉邦のご子孫と伝えられる高橋氏が、劉邦についての伝承等をお話しになります。

24日(日) 午後1時
万葉集と漢文を読む会
万葉集は巻第十四「東歌」相聞歌を読み進めています。漢文は「隋書」東夷伝です。

1月 14日(日) 午後1時（開場12時）
古田武彦氏新春講演会 演題・日本の縄文国家と韓国の「三種の神器」-エバンズ夫人との輝く十日間のあとに-

28日(日) 午後1時
万葉集と漢文を読む会

2月 4日(日) 午後1時
発表と懇談の会 話題提供／阿久津恒也氏「江釣子古墳群とアイヌ語族の分布」、下山昌孝氏「東北の古代官衙遺跡調査報告」